

「心」を受ける

奨励	朴元 炯怜〔えもと・あれん〕
奨励者紹介	同志社国際中学校・高等学校 宗教科教諭

あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。

(ヨハネによる福音書 13章34節)

はじめまして、私の名前は朴元炯怜と言います。3年前に同志社大学大学院神学研究科を修了し、現在向かいにある、同志社国際中高で宗教科の教員として働いています。昨年は、高校2年生の担任をもっていたのですが、クラスで日直日誌といって、その日の出来事を書いていきます。いわば、クラスの日記のようなものです。そこでは、一人ひとりの「個性」がでてきたり、今何に関心をもっているのか、どんなことに不安をもっているのか、もちろんすべてが書かれているわけではないですし、適当に2、3行だけ書いて終わらすという生徒も沢山いました。でも、意外な発見があったりと、私自身が毎日楽しく読んでいました。そして、1年も終わりが近づき、高校2年生は3月に行く沖縄研修旅行で、学年としての行事は終わります。日誌には沖縄への期待や、学年が終わってしまう寂しさを書き連ねたり、また自分自身で1年を振り返る生徒もいます。そのなかで、とある生徒の書いたものが非常に印象的でしたので、紹介をしたいと思います。

「ちょっと最後やから、クラスの思い出でもふりかえってみよか。あー、なーんにもないなあー。けど後悔してないわ。特に何かがあるクラスでもなかったけど、オレが生きてきたなかで一番平和なクラスだったと思うわ。これって意外とすごいよ。じゃあ終わり」。

本当に何気ない文章ではあるのですが、私はそれを読み、彼の視点に感心させられました。人間、毎日何事もなく過ぎていくことに対して、「もっと刺激があったほうがいい」と思うときがあると思います。それは年齢に関係なくあるでしょう。しかし、彼は、「毎日特に何もなかった」けれども、そこに「平和」を感じとったわけです。その「平和」に対して「これって意外とすごいよ」と自らコメントしています。本人にどういことが確認はしていませんし、本人は何気なく書いたひと言なのかもしれませんが、この「意外とすごいよ」にひきつけられました。「学校」という中で何気なく過ごし、一見平和にみえても、大なり小なり色々なことは起きています。それでも、その何気ない日常を、「平和に過ごせること」それがどれだけ恵まれていることなのか。彼自身が1年を振り返ってそう感じたのかなと、私は思いました。

当たり前の「日常」

実は、私たち自身がそのことに気がつきにくいというもありますが、それでもこの1年ほどは、私たちはとりわけ「日常」を保てることの意味深さを感じているのではないでしょう。今月で「東日本大震災」から1年3カ月が過ぎました。もう、何度となく震災で、多くの「信じられないこと」を目で見て、耳で聞いてきました。実際に被災地へボランティアに行かれた方もいらっしゃるでしょう。少しずつできることからとはいえ、1年たっても厳しい現状は続いています。いつまでこの状態が続くのか。

今年の2月頃、私が出席している教会に、宮城県石巻市で被災した方が来られ、そのお話を伺う機会がありました。お話のなかでは、地震当初の状況、津波で家を流されてしまった人たちが、家をあらためて建てるとして、一体そのお金はどうするのか。土地を買い上げてもらうにしても、その土地の値段が下がっているの、別の所に移り住むにしても厳しい。さらには、心のケアの部分でもサポートを必要としている方が本当に多くいる。平穏な日が突然奪われてしまった苦しみ、その平穏を取り戻す大変さ。その方が言われた「大変なのは本当にこれからです」という言葉にとてつもない重みを感じました。毎日ご飯を食べることができて、安心して眠ることができて、仕事ができる……。この「当たり前の日常」をおくれていること、自分が置かれている環境がどれほど恵まれているのか。お話を伺うまで、本当に無自覚に過ごしていた自分がとても恥ずかしくなりました。

「こだまでしょうか」

もうすでにどこかで聞かれている話かもしれませんが、東日本大震災後、ある人物が注目されるようになりました。本屋さんの店頭で大正の女性詩人である金子みすゞの詩集が平積みになっているのを見た方がおられるかもしれません。私も昨年頃から、本屋さんの店頭でコーナーができていたことに「なんだろう」と思っていたのです。気になってインターネットであれこれ調べたところ、昨年の東日本大震災、ACジャパン（公共広告機構）という二つの言葉に行き着きました。

3月に地震が起きた直後、あちこちのテレビで、CM自体が自粛となり、ACジャパンのCMを多く目にしたことを覚えておられるでしょうか。ACジャパンはこれまでもメッセージ性の強いCMを数多く送り出していますが、ホームページには、次のようなことが載せられています。

「3月11日の大震災は、世情を一変させました。ACジャパンには数々のご意見が寄せられました。それらを総合的に分析して、今この時期にACジャパンから発信すべきメッセージは『思いやり・助け合い』の方向に絞ることが適切であると判断しました」。

震災直後の動きとしては、被災地への応援、生活者の心構えなどをテーマに、ACジャパンとして臨時キャンペーンを立ち上げたようです。その後は、「ささえあったら、人になる」、「わけあううれしさ」などをテーマにした人と人との関係性を強調したものを中心にしています。

このなかで、昨年度の東京で流されていたCMに金子みすゞの「こだまでしょうか」という詩が使われ、それが大きな反響をよんだようです。

こだまでしょうか

「遊ぼう」っていうと
「遊ぼう」っていう。

「馬鹿」っていうと
「馬鹿」っていう。

「もう遊ばない」っていうと
「遊ばない」っていう。

そうして、あとで
さみしくなって、

「ごめんね」っていうと
「ごめんね」っていう。

こだまでしょうか、
いいえ、誰でも。

女性の落ち着いたトーンの声で詩は読み上げられ、CM最後には「やさしく話しかければ、やさしく相手も答えてくれる」というキャッチコピーが入ります。CMの製作者は、「たったひとりで、人は傷つく。たったひとりで、人は微笑む。自分がやさしく話しかければ、きっと相手も、おだやかに答えを返してくれる。『ことば』は、人から人へ『こだま』します。この広告が、人と人のやさしい会話のきっかけになることに願いを込めました」と書いています。

このCMが放映された後、金子みすゞの詩集を多数出版している出版社には、書店や個人からどの本に収録されているのか、といった問い合わせが殺到しました。担当者は、「元々金子みすゞは生前は無名で、1980年代に口コミで世の中に知られるようになった詩人。それだけ強い言葉をもっています。『こだまでしょうか』は、相手を思いやるという詩なので、こんな時期だからこそ人を惹きつけているのかもかもしれません。阪神大震災のときも、金子みすゞの詩集を被災地に送るという動きがありました」と述べています。

金子みすゞは、26歳で自ら命をたてしまったという悲劇の詩人です。彼女の人生そのものも決して明るいものではありませんでした。しかし、そこからは想像もできないような、彼女のあたたかみをもつ詩。詩の題材は身のまわりの平凡なものが多く、奇をてらったものは何一つ見られませんが、それらを見つめる目には確かに非凡なものが、その詩情の豊かさには感性の鋭さを感じ取ることができます。そして、自然に私たちの心にあかりをともしような作品でもあります。辛いときだからこそ、余計に彼女の詩が私たちにあたたかさをもたらし、多くの人がびとをひきつけているのかもかもしれません。

先ほどの、この『こだまでしょうか』という詩は、自分からおはようって言えば相手もそう言ってくれるし、自分が嫌なことを言えば相手も嫌なことを言う。自分がうれしいことを言えば、相手もうれしいことを言ってくれる。こだまのように同じことが返ってくるもの。相手を思いやって声をかける意味を教えてください。

毎日生活していくなかで、本当に必死で生きている。ほとんどの方がそうであると思います。でも、少し視線をあげて全体を見渡していくと、私は「相手を思いやる」を少しずつ加えていくことで、いつもよりも日常がやさしくなるのではないかなと思っています。自分のことで精一杯のとき、相手を思いやる余裕はないのかもしれませんが。でも、それは、そんなにたいそうなことでもなくても、本当にささやかなことからでいいと思います。「おはよう、こんにちは、さようなら」とあいさつすることでも十分です。

「心」を受ける

今日の聖書の中では、イエスが新しい掟として「互いに愛し合いなさい」と言いました。この「愛する」ということ。今日のメッセージ題にもさせていただきます。「愛」という漢字をじっと見ると、「心を受ける」とも読み取れます。「愛」は一方的に受けたり、あたえるのではなく、「互いを思い合う」ということです。イエスが私たちに述べる愛は、距離の近さや遠さは関係なく、今しんどい思いをし、重荷を負っている人や悩みを抱えている人、そのような人たちのことを心に留め、「愛」をもって共に生きよということです。そして、そこには、私たち自身が神の愛によって、支えられている存在であるということを忘れてはならないと思います。その思いがあるからこそ、共に喜び合い、共に涙する存在になれるのではないのでしょうか。直接手を差し伸べることができないことも多くあります。そんなとき、私たちは祈ることしかできないかもしれません。それでも、「祈る」ことによって「互いを思い合い、共に生きることができるんだ」ということ、また一方で、誰かが自分のために祈ってくれているんだということを覚えて、お互いに思い合い、お互いにしっかりと「心を受ける」存在になれたらと思います。

2012年6月13日 京田辺水曜チャペル・アワー「奨励」記録